

ルカンも亦たツルク、シン(支那)、カタ(契丹)其の他の諸國人より成る大軍を集め、サルタンとカトワン(Katwan)に遭遇し、之をしてデルガム(Dirgham)の谷に退かしめ、一一四二年此の處にて決戦せしがサルタンは敗走し、其の妃及び多くの將帥は擒へられぬ。かくて此の戦ひの後契丹人及びツルク人はマヴェランナールに其の勢を占めぬ。グルカンは一一四三年に死せし迄此の地に駐まりたり」と(Bretschneider. Mediaeval Researches. I. 231-233) 彼に次ぎて十四世紀の著者アブルフェダ(Abulfeda)も亦た此の一一四一年のサルタンの敗戦を記せるが(Deguinges. Histoire generale des Huns. Tom. II. Livre X. p. 254) 十五世紀の著者なるミルコンド(Mirkhond)も亦た之を記し、サルタン・サンジャールがサマルカンドを征して此の地方に權勢を振ふや、「當時サマルカンド地方に住みたりし黒契丹カラキタイは、サンジャールの暴虐の爲に苦痛と恐怖とを感ずるに至れり。……彼等は此の頃ツルケスタン諸王の間に最も勢力を占めしグルカンの許に至り、ホラッサン王が老年薄志にして、國政は小兒と奴隸の手にあることを通ぜしかば、グルカンはこゝにサルタンと戦ひホラッサン及び、トランスオキジアナを征服せんと決心し、大軍を組織してサルタンに向ひぬ。……兩軍相戦ふや、無數の敵軍はサルタンを包圍し、其の結果回教軍は慘憺たる敗戦に陥り、三萬の士卒は戦歿し、サルタンは……辛ふじて十數人の部下と共にテルメドの塞に逃れしが……此の戦ひに於てサルタンの軍中名あるもの一萬は殺され、サルタンの妃ツルカンカツンは、二三の最も有名なる大臣と共に捕へられたり」(Mirkhond. Geschichte der Seldjuken. S. 159-161) と記せり。此戦ひは此の如く遼史本文には尋思干即ちサマルカンドに於て戦ひたるものなるが如く記し、イブン・エル・アチルはカトワン、デルガムの兩所に行はれたるものなりとし、ミルコンドは實際の戦場を示さずして、たゞサルタンがテルメドの塞に逃